



東京都知事 小池 百合子さん

1952(昭和27)年7月15日 兵庫県生まれ。1976年10月 カイロ大学文学部社会学科卒業。1992年7月 参議院議員、1993年7月 衆議院議員、2003年9月 環境大臣、2004年9月 内閣府特命担当大臣(沖縄及び北方対策)兼任、2006年9月 内閣総理大臣補佐官(国家安全保障問題担当)、2007年7月 防衛大臣、2010年9月 自民党総務会長、2011年10月 予算委員会理事、2016年8月 東京都知事

小池都知事に聞く

TOKYO Now
首都東京の今

世界に誇れるまち・東京へ “共感”こそが人を動かす

東京都では、都民ファーストの「新しい東京」をつくるため、2020年に向けた具体的な実行プランを策定。さまざまプロジェクトがスピード感をもって進められています。改革の舵を取る、東京都知事・小池百合子さんにお話を聞きました。

“都民ファースト”は当たり前 大都市・東京を暮らしやすいまちへ

「都民ファースト」の都政を実現するため、今後どのような改革を？」

これまで多くの人は、東京都政という身近な政治・行政にあまり関心を持たれていなかったように思われます。しかし、子算規模はスウェーデン一国並み、人口は世界有数の大都市、東京2020大会も開かれる。この都政が「都民ファースト」なのには当たり前。お金はどう使われ、どのようになっているのか、その辺りについてお話を聞きました。これは、よい・子育てしやすい、働きやすい、世界に誇れる首都にしたいと思っています。

東京2020大会をきっかけに ユニバーサルな街づくりを

「都民が一丸となり、東京2020大会成功への機運を盛り上げるには？」

私は東京2020大会を子どもたちの記憶に残る大会にしたいと考えています。競技会場を残すことをレガシーといいますが、実は私は施設も残ることながら、皆さんの記憶こそが最大のレガシーだと思っています。引き継ぎたいと思っています。例えば、同大会をきっかけに、街中の段差を取り除いていけたらと思います。また、「都市鉱山」と呼ばれる使用済み携帯電話などに含まれる金属から、東京2020大会で使用するメダルを製作し、同大会への参加意識を高めるプロジェクトも推進しています。

制度改革が意識を変える 長時間労働をやめる勇気を

「新しい東京をつくり上げていくため、どのように都民の共感を得ようとお考えですか？」

一例として、私が環境大臣時代に開始した「イクビズ」がここまで一気に広がったのは、女性の共感を得たためだろうと思います。男性だって真夏のネクタイ着用について「早く誰か声を上げてくれ」と思っていたはず。また、キャンペーンを経団連のトップから始めたので、社会に広がり、意識を変えるべきは、働き方ですね。日本では残すので、皆さんの参画を期待しています。

東京の女性たちへ Message

女性の力、特に知恵を生かさないことほど、もったいないことはありません。日本人の特性が、“できない理由”を先に考えてしまいがちですが、まずは“できる理由”を考えてみましょう。そのためには、一歩踏み出す勇気が必要です。男性・女性は関係なく、「あの人のスキルが必要だ」とみんなに思ってもらえるよう、自分磨きをしっかりとすることが大切だと思います。



激務を乗り切るための健康法は「ただただ寝ることです。ほかに何もありません」と小池都知事。常にさまざまなアイデアを考へることが、逆に気分転換になるのだとか。また、お風呂は発想の泉なのだそう。